

## B. 生徒指導に関する研究

### 多層化する中学・高校生の生徒指導上の諸問題

—— 生徒会、学校行事、進路指導等を通じて ——

鈴木洋一郎 中野 満男 米山 誠 服部 晴子  
徳井 輝雄 白井 宏 米田 閏一 斉藤 真子  
山田 雄一 今治富美子

#### 序

中 野 満 男

各教科の教育にあっては、それはそれで流動する部分があるにしても、すでにかなり固定した理念があり目標やカリキュラムが確立しているので、指導にあたって少くとも根底的な不安や迷いを持たずにすむことはたしかである。

教科外の活動となると、その点がいかにあやふやであるために、その過程の中でいつも教育的な価値や効果がどこにあるのかという根本的な問いかけをしていなければならないし、明確にしたいけれどもなかなか明確にならない苦しみを味わわなければならない。

特活その他の活動やその指導の中で、目標として挙げられるものには、例えば 自主性、協調性、創造性等々、あるいは気力体力の強化等の言葉を列挙することはできる。また、教科の教育ではできないような全人格的教育を行うのに役立つと言われもする。けれどもそのように言葉として、または考えとして述べることはできても、実際の場面でそれを具体化し実現しようということになると、大変な困難にぶつからなければならない。

実現をむずかしくしている要因はいろいろあるだろうし、その中には時代、社会、家庭など我々のあまり手の届かないところにあるものもある。このようなものを我々はなぜ学校教育の場の中に設けなければならないのかという、特活不要論に通じるような疑惑も一方にあるが、この考えを不要論の方向へ向けるのではなく、むしろ必要性をさぐる為の原点に置いて、その努力の方向に向いたいと考える。

この研究には特別なその為の場面を設けることはし

ない。我々の前には現実に生徒会があり、諸活動や行事があり、いや応なくそれらを仕上げては過ごして行かなければならない毎日があるのであり、これがそのまま研究の材料であると思っている。また、研究をする為の特別の方法をとるのでもない。それをそつなく処理して行くのではなく、より調子の高い、内容の充実したものにする努力を重ねることがそのまま教育的価値や効果をさぐり、見つけ、獲得して行くことになるのだと思う。

努力を重ねるとは言っても、明確なものがない以上、それは試行錯誤の連続であり、成功したり失敗したり連続であり、その現象の分析や反省の中で常に手さぐりに以た仮説を立てては進むことの連続である。

それぞれの場面は入り組んだ要素で形成されている。その要素の中には、指導の適否や過不足、教師集団の積極性とか組織のあり方など、教師側の持つ問題もあるし、また当然生徒側の持つ問題もある。生徒側の問題は、勿論教師の指導や働きかけによって相当に動き変化するものであろう。教師が投げかけるものに対してどう受けとるかという、或いは生徒がどんな球を教師に投げてくるかという素地でもあるが、これはまた個人と集団のそれぞれの性格と相互的な働き合いがあるであろう。そして教師と生徒の間で行われるキャッチホールで生じてくるダイナミズムを見ながら進行することがこの研究である。

我々はこの問題の大きな柱として「自主性」をとり上げてこれまで進んできた。自主性とは言葉としては簡単であるが、これ程把握の容易でないものも少い。

我々が生徒に獲得させたく思う自主性とは、正しい方向に向っての「やる気」であり、安易な方への逃げ道ではないという程度の共通認識には立っているものの、現実場面での方法論や評価についてはそれぞれの場面での表れ方についての討議を待たなければ結論の得られないような問題にぶつかることも多い。特活やそれに類したものには、出席簿やテストや単位などによる生徒の行動の義務やきまりの観念が及ばない。その中で意欲やエネルギーをかき立て、生徒の集団をやる気にさせることは困難ではあるが最も重要なことだと思う。ところがそれが有用で望ましいと教師側が考える形は、しばしば生徒にとって苦痛なものであったり、すぐには興味や関心のもてないものであったりする性

質のものであることが多く、この火のつき難い物体にどうやって火をつけるかということに殆どの精力をつぎ込まなければならない。

結局は、個々のいかなる教育観が、いかなる指導の技術や体制によって、いかなる熱意をもって、いかなる相手（生徒）に向って、いかなる遭遇場面で作用するかという、「いかなる」という未知数ばかりがからみ合っているものであり、このそれぞれの「いかなる」を全体のバランスの中でいかに高めることができるかという努力であろうか。

この研究はこうした行為のありのままの記録である。記録の域から出ていないことは残念であるが、これが現在の我々にできる最も確実な研究であると思っている。

## 〔 I 〕 中学・高校生徒会指導の実践的研究

### —— 51年度の成果と問題点について ——

米 山 誠

#### 1. 51年度中学生徒会指導の要点

##### (1) 51年度指導方針

中・高別々の生徒会組織により、それぞれ独自の活動と、両者合同の活動とを調和させながら指導してゆくことは、かなり困難な仕事である。中・高両者の活動を同時に活発に展開させることをめざすのは当然であるが、実際問題として、例年、指導の重点が高校側に傾き、中学に対する指導は消極的となり、年中行事を惰性的にくり返すだけに終りがちであった。そうした傾向を反省して、51年度の生徒部は、中学生徒会の指導をあらためて重視し、活気と秩序のある活動を推進することを基本的な目標とした。そして、年間諸活動の指導に当たって、計画段階から実施段階まで、生徒部、学級担任、全教師の協力体制を原則として、こまやかな配慮と強力な指導の下に、執行部、議会、HR、各委員会、各部など全組織を通じ生徒を積極的に活動させていく方針を立てた。

##### (2) 指導事例

① 生徒会予算の中・高分離 —— 従来、生徒会予算は中・高合同の形をとってきたが、実質は高校側本位に予算編成が進められ、使用される結果になってい

た。そこで、中学独自の活動を予算的にも保証し、また、高校に従属的でなく中学側の主体性と責任を自覚させることを目的として、51年度予算の編成は、中・高別予算区分を明確にすることを試みた。中・高生徒会の合意のうえ実施に移されたが、一応の効果はあったとみられる。

② 遠足時服装問題の検討 —— 遠足時の服装について、高校生は、50年秋の遠足時に軽装が認められた(㊦「紀要」21集 P. 22参照)のに、中学生は同じ扱いを受けなかったことに対して中学生間に大きな不満があった。その問題を51年度初めに生徒会の議題としてとりあげさせ、HR、議会での討議を経て要望を正式な形にまとめさせるように指導した。教官会議での検討により、51年秋の遠足には中学生の軽装も認めることが決定された。顧問や担任の指導の下に生徒が熱心な討議を通じて要求の実現を体験したことの意義は大きいと思われる。

③ 文化祭の充実化 —— 1学期の中学小文化祭、2学期の中・高合同文化祭の実施に当たって、例年の消極的、惰性的な姿勢から脱脚させるべく、プログラムの検討を始めとして、準備から実施まで文化委員会執行部を中心に多数生徒を積極的に活動させ、活気のある文化祭とすることができた。(㊦詳細は服部晴